

## 談話室

## アジア工科大学(AIT)における生活

新居和嘉

(1998年9月21日受理)

## Daily Life in Asian Institute of Technology (AIT)

Kazuyoshi Nii

Structural Engineering, School of Civil Engineering  
Asian Institute of Technology  
P.O. Box 4, Klong Luang, Pathumthani 12120,  
Bangkok, Thailand

(Received September 21, 1998)

私が頂いた表題は「タイにおける研究生活」というのでしたが、まだ研究もなにもやっていないので、勝手に「研究」を取り、ただの「生活」にしてしまいましたのご容赦下さい。

私は今年の4月から、科学技術振興事業団の「研究協力者海外派遣事業」に乗って、タイの上記大学に来ております。こちらに来て半年近く経ちまして、何となく生活も定常状態になってきましたし、またその間何となくまわりを見回してしまっていて、多少感じたこともありますので、その辺を書かしていただきます。もちろん、まだ来て半年弱ですし、親しくタイ人と話をしたというわけでもありませんので勘違いも多々あると思いますが、単なる傍観者の言として読んで下さい。

## I. 日常生活

朝は7時にタイ人の運転する車でアパートを出て、車中ほとんど話をすることもなく8時ちょっと前に大学に着き、それからは自分の部屋にこもって講義の準備と、たまに今年面倒を見ることになった学生との修士研究の打ち合わせ、昼食はAIT Centerで日本人教官と駄乗りながら取り、4時になったら大学を出て、家に帰ってシンガポール版の日経新聞を読みながら、NHKのニュースを見ながら夕食を取るといった生活です。

今のところ、日本からは離れ、そうかといってタイの社会とも馴染んでいない、何となく浮いているといった感じです。私自身にちょっと人見知りするところがあってなかなか他人と打ち解けられず、その上、語学下手ということもあって英語での会話はなるべくなら避けようとするものですから、なかなか大学内の人間関係に積極

的に入っていけません。自分でも英語が旨いとは思っていませんでしたが、来た当座はタイ人の話す癖のある英語がほとんど聞き取れませんでした。語尾の上がる非常に奇妙な発音をします。しかしこれは英語の native speaker でない者同士が英語で意志を通わせるときの障碍で、お互い変な発音をするなど思っているのではないかと思います。発音は変でもタイ人の教官は一般に英語が非常に上手です。我々日本人は日本にいる限り仕事の上で英語の読み書きは必要でも話す必要はほとんどありませんが、タイ人は研究者としての最終の教育をアメリカの大学で受けてきた人が多く、さらに仕事をしていく上で英語を喋ることは必須で、その機会も圧倒的に多いようです。現にAITの中は英語が公用語です。

そうは言いながらも、9月からは講義も始まり、学生の実験も始まりますので、否応なしに学生と接触しなければならず、それにつれて大学の中での人との関わりも何かと深まって、少しは足が地についた感じになるでしょう。

## II. 大学での仕事

講義は“Fundamentals of Structural Materials (Metallic)”という特別講義(選択)をすることとし、今揭示をしています。9月3日からオリエンテーションが始まりましたが、今学期はほとんどの科目が必修ですので、選択科目は何人登録してくれるかちょっと気になるところです(結局、単位として登録したのが3人で、80%以上出席するが、試験なし、単位なしという聴講生が7、8人で計10人ぐらいということになったようです)。

講義の内容は、最初は簡単に腐食の話でも思っていたのですが、こちらに来ていろいろ考えているうちに、土木工学の学生相手ですから金属学の初歩からやった方がよいだろうということになり、原子結合、結晶構造から始めることにしました。そのため40年以上前に読んだ金相学の教科書などを取り出して読み直してみました。結構面白く、為になりました。それにしても日本人の書いた教科書のなんて薄っぺらなことよと、今回、改めて思い知りました。アメリカ人の書いた教科書の中には、基礎を、正確さをできるだけ保ちながら、本質的な部分を単純に非常にわかりやすく書いたものがあり(日本人の書いたものは小難しく、しかも説明に省略があるので理解しにくい)、しかもApplicationにまで視点が及んでいるということで、非常に優れた教科書になっています。英語で書かないとマーケットが広がらないということもありますが、まだまだ日本の工学教育の層の薄さと、大学の先生の怠慢を感じました。

学生の修士論文の題目は“Influence of Chloride on Corrosion Behavior of Reinforcement in Concrete”ということにしました。これが今年の私の研究課題です。折角、土木工学部にいるわけですからそれに相応しい課題にしようと思い、かなり苦勞しました。私は腐食といっても高温腐食が専門ですし、また材料屋が得意とする腐食現象の詳細な解明などは土木工学部の研究としては相応しくありません。さらに腐食研究に必要な Chemical な計測機器は当学部には全くありませんので、なにができるかでかなり悩み、泥縄式ですがコンクリートの中の鉄筋の腐食を大至急勉強して、何とか土木工学部らしいテーマをでっち上げました。途中ちょっと胃が痛くなることもありましたが、すぐに高をくくるといふ悪い癖が出て、できあがった今になってみると、意外に良くできたなと思っています。とにかくこの年になって全く初めてのことを、しかも腐食関係の文献は全くない、装置も全くないというところで始めようとは思っていませんでした。

ここに書いたように、材料屋、特に私のように高温腐食の専門家が土木工学部に来ますと、これまでの自分の専門を生かすことができず苦勞します。最初は軽く考えていたのですが、いざその場になって本気で考えると講義にしても研究にしてもどうすべきかで迷い、苦勞が絶えないというところでした。しかし土木工学部にとって金属の溶接、疲労、腐食などは重要な学問分野のはずで、AIT の School of Civil Engineering に金属材料の講義や研究を何とか根付かせることはできないかと、今、考えています。

### III. AIT について

この大学は一種の国際機関でタイの大学ではありません。AIT の“Annual Report”を見ますと、大学の収支は日本円で約 30 億円といったところです。援助国として、Governments の援助が一番多いのがタイで、全援助額の 13.43%、次に多いのが日本で 8.70% です。しかし EU はトータルですと 27.91% を出しています。これらの Governments の援助が全援助額の 73.14%、International Organizations が 7.45%、National Government Agencies がトータルとして 11.88%、Business, Foundations, Private Industries and Others が 7.53% となっています。このように AIT は資金からいって国際機関のはずですが実際にはかなりタイ化しており、さらにまたタイ化しつつあるということのようです。最近、いろいろな機会に学生の国籍の diversity ということが話題になっています。ちなみに私がおります Structural Engineering Field の 35 名の新生生のうち、24 名がタイ人、3 名がネパール人、後は

フィンランド、ラオス、ミャンマー、パキスタン、フィリピン、中国、チベット、ベトナムが各 1 名となっています。

当大学はアジア-太平洋地域で最高の教育・研究および対外活動をしていかないとその存在意義を失います。そのためいろいろな会議の折りなどに研究活動を活性化しなければならない等の話はできますし、School of Civil Engineering では、最近、Dean の Prof. Worsak Kanok-Nukulchai が Citation Index で各人の論文の Citation の状態を調べるから論文リストを出せなどというお達しを回したりしています。今のところ残念ながら私には各 Faculty Member がなにをやっているのかさっぱり見えていません。

AIT は、現在、財政的にかなり危なくなりつつあるという話を聞きます。大援助国であったドイツ (EU の中で最大、6.69%) が 2 年先には援助を止めると言っているし、そのほかカナダは手を引いたとか、どこは手を引いたというような話を聞きます。日本 (8.70%) も援助を止めることを検討しているという話を聞きます。この大学に来ていた学生はほとんど何らかの奨学金を貰っていますが (インドとパキスタンが核実験をやりますと、両国の学生には奨学金を出さないと北歐の国が言ってきます。このへんは確かに国際機関だなどと思いますし、日本ももう少し sensitive になって良いんじゃないかとも思います)、援助が減り奨学金が減ると、自費の学生を取らざるを得なくなります。この学費はかなり高く (修士 5 学期 (1 年 8 か月) で約 23,200 US \$)、自費でこられる学生は金持ちの一部に限られてしまいます。最近では入学するには学力よりも経済力の方が重要になっているのではないかと懸念があるとも聞きました (このようなことはタイの方には余り聞かされません)。

いずれにしろタイ人の教授やタイ人の学生が増えて、この大学がタイ化してしまいますと、この大学の存在意義がなくなってしまいます。現在、高学歴のためには欧米に行くのが最良でしょうが、そこまで経済的余裕のない学生が“the next best”として来ているというところだと思います。これがタイの大学でしたらにも近隣諸国から学生が集まる理由はなくなります。近隣諸国の大学、特に“National Singapore University”は自分たちの方が上だと思っているようだというようなことを日本人同士では話しています。

ちょっと中途半端ですが、紙数も尽きましたのでこの辺で止めます。もう少しタイ通になったところで、もう一度、今度は遊びも含めて書かしていただきたいと思います。